



ふじのくにから 世界へ!

静岡県には世界に誇りうる自然、文化、産業などの資産が豊富にある。その魅力あふれる資産を最大限に活かして富国徳の理想郷“ふじのくに”を目指す静岡県の「今」を紹介する。

国内外の交流を深める 静岡県立こども病院の世界戦略

静岡県立こども病院は、本県小児医療の最後の砦として、県内全域から患者を受け入れており、さらに県外からも多くの患者が訪れる全国トップクラスの小児専門病院である。特に循環器分野においては、全国のこども病院で唯一、小児循環器専用の集中治療室と専任スタッフを配置し、他病院では治療が困難とされた患者を受け入れるなど、国内のみならず世界のトップランナーとして知られている。そのため国内外から熱意を持った医師がスキルアップを目的に同院に集まり、また同院からも海外へ診療支援や研修に医師を毎年派遣している。県民にとっては頼もしい限りだ。

同院が推進する国際交流には医療貢献とともに、医療の質を高め優秀な人材を確保する目的がある。同院の瀬戸嗣郎院長は「医師の技能レベルは経験値に比例します。したがって治療の機会が多いほど良いのですが、日本は少子化が進んでいるため、機会は減少傾向にあります。こ

のまま放置すれば、経験不足による医療レベルの低下は免れません」と語り、5～6年前から積極的に国外の医療機関と連携して人的な交流を図り、医師の技能アップに努めている。その結果、世界中から最先端の情報が集まり、医療レベルも高水準化するという理想的なサイクルが生まれている。昨年9月にはマレーシア国立循環器病センターと連携し、10万人に5人が発症すると言われる心疾患「カントレル症候群」の少女(14)を受け入れ、世界で初めて根治的手術を成功させた。瀬戸院長は「言語、食文化、宗教観などさまざまな課題

を乗り越えたことで、海外患者の受け入れに対する心理的な壁が低くなり、当院の国際化が大きく進んだと実感しています」と語る。

国際的なプレゼンスが高まっている中、同院はさらなるレベルアップを目指し、医師の海外派遣や海外からの患者の受け入れのほか、国際学術フォーラムの開催など、今後も積極的な国際交流を推進していくという。質の高い医療レベルを保持し、世界のトップランナーとして走り続ける静岡県立こども病院のチャレンジに終わりはない。



国際的な小児医療の拠点施設となることを目指す県立こども病院が、各国と国内主要施設間のネットワーク強化を目的に開催した国際学術フォーラム「Mt.Fuji Network Forum」。

